

## 長大 築地恒夫、山下務

1. まえがき レイレ・リツ法は板の自由振動解析の有効な一方法として、従来から研究され应用されてきた。レイレ・リツ法を使用するには、先ず、幾何学的境界条件を満たす板の変位関数を仮定する必要があり、その関数の一つとして、次のようには假定するとよいとされている。

$W = (a_1 x + b_1 y + C_1)^{n_1} (a_2 x + b_2 y + C_2)^{n_2} \cdots (a_r x + b_r y + C_r)^{n_r} \sum_i a_{ij} x^i y^j$

ここで、 $a_i x + b_i y + C_i = 0$  ( $i=1, \dots, r$ ) は板の第*i*番目の辺の方程式、 $a_{ij}$  は未知定数である。しかし、このたゞわみ関数を使うことは、(i) 一つの辺上  $\alpha$  境界条件は内であります、(ii) 板は凸多角形である、(iii) 板の形状が簡単でエネルギーの積分が簡単にできる、という制限がある。そこで、本報告では、上記制限を解消するレイレ・リツ法とラグランジエ乗数を用いて提示し、代表的な問題に適用してその有用性を明らかにする。

2. 解析に必要な基礎式 図1に座標軸を示す。板の曲げ変位を  $W(x, y)$

とすると、板の自由振動に関する汎関数は、幾何学的境界条件をラグランジエ乗数によって付加することにより、次のようになります。<sup>(1),(3)</sup>

$$\begin{aligned} \Pi &= \frac{D}{2} \iint_A [(\bar{w}_{xx} + \bar{w}_{yy})^2 + 2(1-\nu)(\bar{w}_{xy}^2 - \bar{w}_{xx}\bar{w}_{yy})] dx dy \\ &+ \sum_{r=1}^{n_r} F_r W(x_r, y_r) + \sum_{t=1}^{n_t} \int_0^L T_t(s) W ds + \sum_{u=1}^{n_u} \int_0^L M_u(s) (\bar{w}_x \alpha_u + \bar{w}_y \beta_u) ds \\ &- \frac{1}{2} \iint_A \rho h \omega^2 W^2 dx dy \end{aligned} \quad \cdots \cdots (1)$$

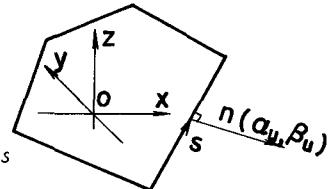


図1 座標軸

ここで、 $D$  は板の曲げ剛性、 $\nu$  はボアソン比、 $\rho$  は板の密度、 $h$  は板厚、 $\omega$  は角振動数、 $\bar{w}_{xx} = \partial^2 w / \partial x^2$  以下同様である。また、 $F_r, T_t(s), M_u(s)$  はラグランジエ乗数で、右辺の第2項は板の*r*番目の角の変位  $\theta$  の条件、 $x_r, y_r$  は同様の座標、第3項は*t*番目の辺の変位  $\theta$  の条件、第4項は*u*番目の辺の法線方向のたゞわみ角  $\theta$  の条件を示す塊で、 $\alpha_u, \beta_u$  は*u*番目の辺の外向法線  $n$  方向余弦である(図1)。

$W = W/a$ ,  $X = x/a$ ,  $Y = y/a$ ,  $S = s/l$ ,  $L = l/a$ ,  $\bar{F}_r = F_r a/D$ ,  $\bar{T}_t = T_t a^2/D$ ,  $\bar{M}_u = M_u a/D$ ,  $\bar{\Pi} = \Pi/D$  ( $a$  は板の代表寸法、 $l$  は辺の長さ) なる無次元化を(1)式に行い、たゞわみ  $W$ 、ラグランジエ乗数  $\bar{F}_r, \bar{T}_t, \bar{M}_u$  を次のように假定する。<sup>(2)</sup>

$$W = \sum_i \sum_j a_{ij} X^i Y^j = \sum_i \sum_j a_{ij} \bar{w}_{ij}, \quad \bar{F}_r = b_r, \quad \bar{T}_t = \sum_p G_p S^p = \sum_p C_{tp} V_{tp}, \quad \bar{M}_u = \sum_g d_{ug} \bar{S}^g = \sum_g D_{ug} M_{ug}$$

$\delta \bar{\Pi} = 0$  ( $= (2)$ 式と代入すると)、未知定数  $a_{ij}$ ,  $b_r$ ,  $C_{tp}$ ,  $d_{ug}$  は満たす同次連立方程式が導かれ。

$$\sum_i \sum_j (E_{ij} I_{IJ} - \lambda^2 G_{ij} I_{IJ}) a_{ij} + \sum_{r=1}^{n_r} H_{rIJ} b_r + \sum_t \sum_p K_{tp} I_{IJ} C_{tp} + \sum_u \sum_g L_{ug} I_{IJ} d_{ug} = 0$$

$$\sum_i \sum_j H_{ijR} a_{ij} = 0 \quad (R = \dots, n_r) \quad (I = \dots, n_i, J = \dots, n_j)$$

$$\sum_i \sum_j K_{ijTP} a_{ij} = 0 \quad (T = \dots, n_t, P = \dots, n_p)$$

$$\sum_i \sum_j L_{ijTQ} a_{ij} = 0 \quad (T = \dots, n_t, Q = \dots, n_q)$$

<sup>(3)</sup>

ここで、 $\lambda^2 = \rho h \alpha^4 \omega^2 / D$  は板の自由振動に関する固有値である。また、

$$E_{ij} I_{IJ} = \iint_A [\bar{w}_{ij,XX} \bar{w}_{IJ,XX} + \bar{w}_{ij,YY} \bar{w}_{IJ,YY} + \nu (\bar{w}_{ij,XX} \bar{w}_{ij,YY} + \bar{w}_{ij,YY} \bar{w}_{ij,XX}) + 2(1-\nu) \bar{w}_{ij,XY} \bar{w}_{IJ,XY}] dx dy$$

$$G_{ij} I_{IJ} = \iint_A \bar{w}_{ij} \bar{w}_{IJ} dx dy, \quad H_{rIJ} = X_r^I Y_r^J, \quad K_{tp} I_{IJ} = \int_0^L V_{tp} \bar{w}_{IJ} dS, \quad L_{ug} I_{IJ} = \int_0^L m_{ug} \bar{w}_{IJ} dS \quad \cdots (4)$$

$\gamma = 1$  时,  $w_{ij,xx} = \frac{\partial^2 w_{ij}}{\partial x^2}$  以下同様である。(4)式の面積積分は一般に、

$$\iint_A \frac{\partial^{p+q} w_{ij}}{\partial x^p \partial y^q} dxdy = \iint_A \frac{\partial^p x^i}{\partial x^p} \frac{\partial^q y^j}{\partial y^q} \frac{\partial^p x^i}{\partial x^p} \frac{\partial^q y^j}{\partial y^q} dxdy = \frac{i!}{(i-p)!} \frac{j!}{(j-q)!} \frac{i!}{(i-p)!} \frac{j!}{(j-q)!} \iint_A x^{i-p-i-p} y^{j-q-j} dxdy \quad \dots (5)$$

と表わされるが、この面積積分を部分積分して板の境界邊に沿った線積分とする。すなはち、

$$\iint_A X^M Y^N dxdy = \iint_A \frac{\partial}{\partial X} \left( \frac{1}{M+1} X^{M+1} Y^N \right) dxdy = \sum_{m=1}^M \frac{\alpha_m}{M+1} \int_0^{L_v} X^{M+1} Y^N ds \quad \dots (6)$$

$\gamma = 1$  时,  $n$  は辺の数である。 $v$  番目の辺の方向余弦  $\alpha_v, \beta_v$  は次式から計算される(図2参照)。

$$L_v = \sqrt{(X_{v2} - X_{v1})^2 + (Y_{v2} - Y_{v1})^2}, \alpha_v = (Y_{v2} - Y_{v1})/L_v, \beta_v = -(X_{v2} - X_{v1})/L_v \quad \dots (7)$$

また、 $v$  辺上の点の座標  $X, Y$  は

$$X = X_{v1} + \beta_v \bar{s}, Y = Y_{v1} + \alpha_v \bar{s} \quad \dots (8)$$

と書けるので、これを用いて(4),(6)式の線積分を計算する。

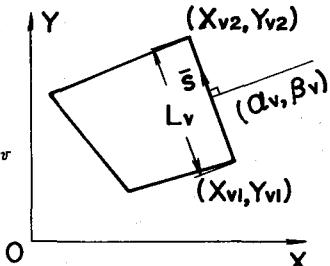


図2 方向余弦

$$\begin{aligned} \int_0^{L_v} \bar{s}^R X^P Y^Q ds &= \int_0^{L_v} \bar{s}^R (X_{v1} + \beta_v \bar{s})^P (Y_{v1} + \alpha_v \bar{s})^Q ds \\ &= \sum_{i=0}^P \sum_{j=0}^Q \frac{P!}{(P-i)! i!} \frac{Q!}{(Q-j)! j!} X_{v1}^{P-i} Y_{v1}^{Q-j} (-\beta_v)^i \alpha_v^j \frac{L_v^{R+i+j+1}}{R+i+j+1} \end{aligned} \quad \dots (9)$$

(5)～(9)式を用いると(3)式の係数(4)式がすべて板の境界に沿った線積分で計算できるため、板の形状に拘束なくエネルギーの計算が可能となり、また、境界条件はラグランジエ乗数を用いて付加できるため、いかなる境界条件の場合にも適用できることとなる。(3)式の係数が計算できれば、振動の固有値入および固有モードは通常の固有値問題と同様にして求められる。

### 3. 解析例 部分固定正方形板(図3)

一辺の  $\delta$  ( $\delta \leq 1$ ) 部分を固定して片持ち正方形板の共振動数(Hz)の解析値と実験値を表1に示す。解析には表に示す近似項数を用いた。

実験は一辺 200mm, 厚さ 2mm のアルミニウム合金試験片(ヤング率 71GPa,  $\nu = 0.33$ , 比重 2.8)にて行なった。試験片に貼ったひずみゲージの出力より共振を判定した。また、図4 1- $\delta$ =0.5 の場合の3, 5次共振時でのノードルラインの位置を示す。

文献 (1) S. Timoshenko, *Vibration Problems in Engineering*, D. Van Nostrand Co. (1955), (2) K. Washizu, *Variational Methods in Elasticity and Plasticity*, Pergamon Press, (1975)

(3) S.T. Timoshenko, S. Woinowsky-Krieger, *Theory of Plates and Shells*, McGraw Hill, Kogakusha

表1 共振固有数 (Hz)

$\delta$	1.0	0.7	0.5	0.3
次数	実験値 解析値	実験値 解析値	実験値 解析値	実験値 解析値
1	40.5 41.8	36.6 38.7	31.1 33.9	23.5 25.9
2	- 101	90.0 91.6	73.1 78.7	55.2 57.1
3	255 255	218 220	170 178	141 142
4	326 332	304 324	276 292	263 273
5	- 369	333 336	320 330	304 307
6	637 647	481 528	414 435	390 397
7	710 756	663 707	609 672	507 538
8	- 799	737 764	721 747	708 740
$W, F, T_c$ $M_a$ の値	35, 2, 3, 3	35, 2, 2, 2	36, 2, 2, 2	35, 2, 1, 1

図4  $\delta = 0.5$  板の1-ダルライン

解 析 (3次) 実 験 解 析 (6次) 実 験

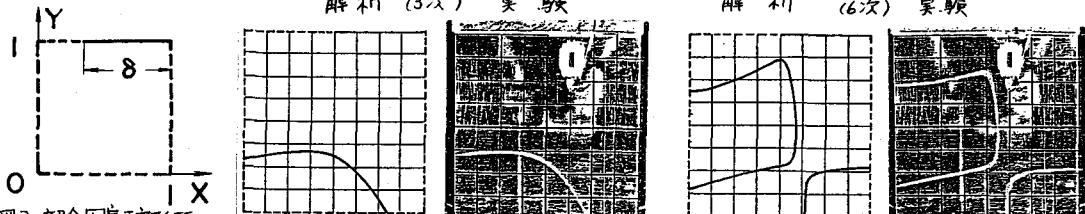


図3 部分固定正方形板